

津久井城跡(相模原市)

築城年代:鎌倉時代、築城者:津久井爲行

ここから津久井城跡へ登って行く/前方の城山に城跡が展開する



少し退いて城山を見たところ



根小屋地区のパークセンター→城坂橋→<御屋敷>→車坂(男坂)→<飯綱曲輪>→<鷹射場>→<宝ヶ池>→<大杉>→<太鼓曲輪>→<堀切>→<本城曲輪>→城山山頂→津久井古城碑と進んでみよう



ここはパークセンターで、根小屋地区と呼ばれる辺りで、江戸時代の陣屋跡らしい



反対側から見たところ



ここはその研修棟



津久井城跡縄張り図がある



津久井城跡縄張り図



凡例	
	曲輪
	築城



荒久地区

拡大図



模型がある/南西側から北東方向を見たところ



南東側から北西方向を見たところ



北西側から南東方向を見たところ



さて、右手に進んでいく/前方に橋が見える



城坂橋/この先は城坂曲輪群が所在したエリアのようだ/欄干に説明板がある

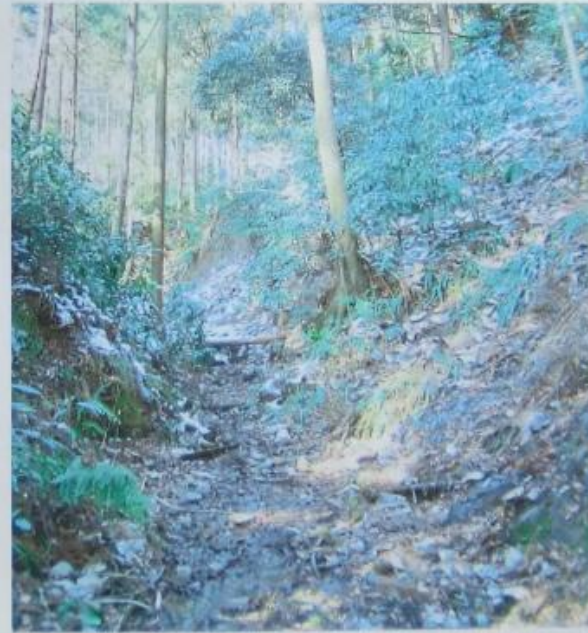


津久井湖城山公園歴史おりえんてーりんぐ

津久井城根小屋攻略 二

牢屋の沢

ここは「ろうやのさわ」といわれています。
牢屋の沢とは、…そう、牢屋があったといわれる沢です。牢屋は、江戸時代初頭に代官がいたときに使われたとされます。代官が裁いた罪人が牢屋に入れられたのでしよう。ここから少し上流の場所にあったようですが、場所までは特定されていません。牢屋は「水牢」だったといわれ、水で罪人を苦しめたものと思われます。戦国時代には地形を削って「堀」として使っていたのだとかがえられています。



県立津久井湖城山公園

これが「堀」



さて、正面の道を登って行くことにする/左手の柵に説明板がある



津久井湖城山公園歴史おりえんてーりんぐ

津久井城根小屋攻略 三

しんでん

このあたりは「しんでん」と呼ばれています。これは江戸時代に「新しい田畑」として開発が行なわれた名残りだと考えられています。ここでの発掘調査では、土塁（土の壁）や、大きな穴などが見つかりました。この穴は橋に関係する柱の穴の可能性が高く、戦国時代にも現在の「城坂橋」と同じ位置に橋が架かっていたのではないかと考えられます。ちなみに、パークセンターに展示してある「相州津久井古城図」では、ここに橋が描かれているのがわかります。

発掘調査のときのようす



県立津久井湖城山公園

さて、少し登ると平場がある/ここが<御屋敷>/東側から西方向に見たところ



お や し き あ と 御屋敷跡

戦国時代、津久井城主内藤^{ないとう}氏が館を構えていたとされる場所です。発掘調査では、深さ2.5mの堀や半地下式の蔵、中国製磁器や天目茶碗をはじめ、さまざまな遺構や遺物が発見されています（現在は保存して埋められています）。

また、落城後、江戸時代初頭には代官によって陣屋関連の施設が営まれていたこともわかっています。



空からみた御屋敷跡



半地下式の蔵跡



さまざまな遺構



江戸時代の入口施設



出土遺物

北東側から南西方向を見たところ



少し進むと手摺に説明板がある

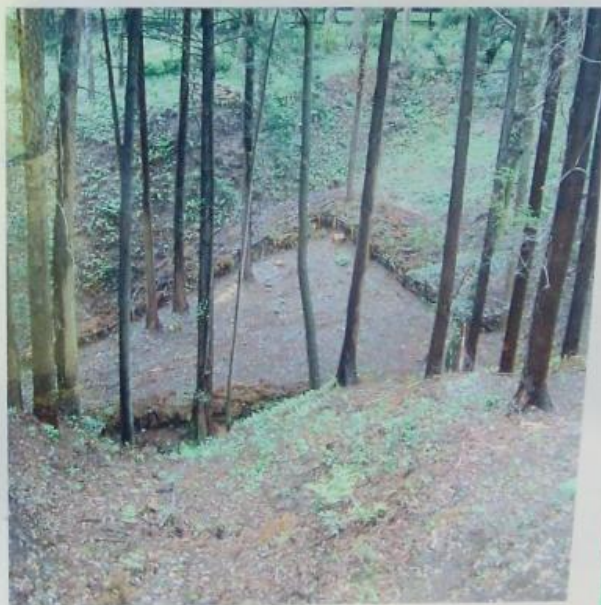


津久井湖城山公園歴史おりえんてーりんぐ

津久井城根小屋取略 九

豎堀と切岸

ここには、「五」でもみた、たてに掘られた堀があります。よくみると地面がへこんでいて、牢屋らうやの沢さわに向かって伸びているのがわかります。発掘調査はつくつちようさは行なわれていないのでどのような形状けいじやうなのかはわかりません。そして、牢屋の沢をはさんだ対岸たいがんにも、平らになっている場所、ガケのようになっている場所きりぎし（切岸）があります。これらは自然の地形ちけいではなく、津久井城つひきぎでとても大規模な土木工事どぼくこうじが行われていたなごりと考えられます。



県立津久井湖城山公園

こんな感じ



これはその付近の展望台から南方向を見たところ





さまざまな説明板がある



津久井湖城山公園歴史おりえんてーりんぐ

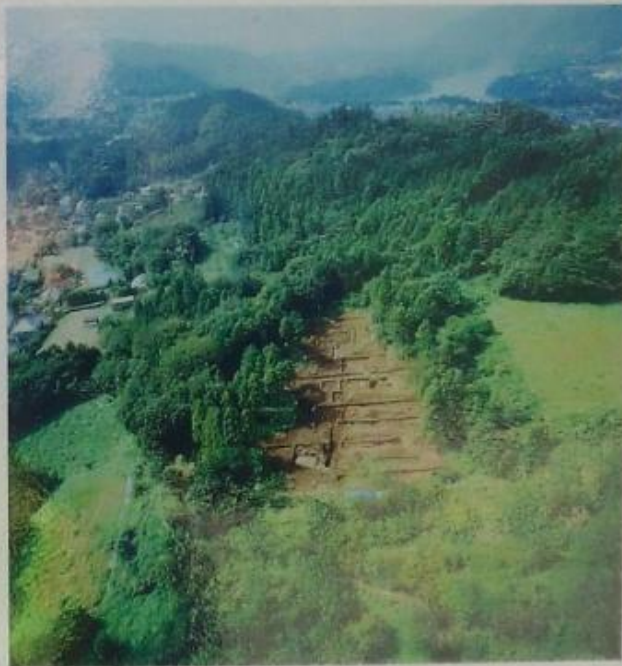
津久井城根小屋政略

七

馬場と御屋敷跡

この下は「馬場」と呼ばれる場所です。馬場の下にある広くて平らなところは、「御屋敷跡（おやしきあと）」と言われ、津久井城主内藤氏が住んでいたとされる場所です。御屋敷跡の発掘調査では深さ2.5mの堀や掘立柱といって穴を掘って柱を立てた建物などのさまざまな遺構、お皿などの遺物が見つかっています。また、江戸時代の陣屋に関する建物もみつかっています。現在はこれらの遺構を壊さないように大切に保存して埋め戻してあります。

発掘調査のときのようす



県立津久井湖城山公園



津久井湖城山公園歴史おりえんてーりんぐ

津久井城根小屋攻略 八

三増峠の戦い

ここから見える風景は「金原」と呼ばれる場所です。左側にみえる山のあたりにあるのが「三増峠（みませとうげ）」です。永禄12年（1569年）、武田信玄が小田原城を攻めた帰りに、追ってきた北条氏と、この近くで戦いました（三増峠の戦い）。津久井城はその時の戦闘には加わりませんでした。その時武田信玄が通ったとされる「信玄道」や、その時の伝説が残る場所が、津久井地域には多く残されています。

県立津久井湖城山公園



県立津久井湖城山公園

さて、ここを登って車坂(男坂)へと向かう



この正面の道が車坂(男坂)



右手に登って行く/左の道は女坂





岩が露出している



正面にベンチが見えてきた



登り切って振り返ったところ/ここは堀切であったようだ



さて、右手に進むと鳥居が見えてくる



ここは<飯綱曲輪>にある飯綱神社



標柱に「飯綱曲輪」とある



飯綱神社社殿



こんな感じ



これは飯綱神社社殿から北側の下を見たところで、平場が見える



下へ降りてその平場を見たところ/腰曲輪のようだ



こんな感じ



そこから正面に飯綱神社社殿を見上げたところ



また、これは飯綱神社社殿から南側の下を見たところで、こちらにも平場が見える



こんな感じ/こちらも腰曲輪か



さて、<飯綱曲輪>から少し東方向に行くと説明板が立っていた



説明板の背後は土塁のようだ



この付近に烽火台(鐘撞堂)があったという

烽火台と鐘撞堂

この付近は烽火台とも鐘撞堂とも伝えられます。戦国時代、城や砦の間の情報伝達には、天気の良い時には、烽火(狼煙とも書く)や旗、吹流しなど、また夜間や雨の日には鐘や法螺貝などの「音」が使われました。津久井城周辺には、敵に備え多くの砦や烽火台が築かれていました。



若神子城烽火台(山梨県須玉町)



『和漢三才図会』に収録された烽火台の図

江戸時代の中期に大阪の医師寺島良安により編集された百科事典『和漢三才図会』を参考にして復元された井桜矢倉式の烽火台です。跳ねつるべの先に火種をとりつけて空中に上げる様式のものです。

烽火はオオカミの糞を火種にしたことから狼煙とも書きますが、オオカミの糞は、真っ直ぐにあがり風にも強いと伝えられます。また葎草や青松葉、火薬、松なども使われていたようです。



津久井城周辺の城砦と烽火台

資料：津久井郡勢誌、城山町史をもとに作成

右手の虎口のような先に平場(説明板では「みはらし」と記されている)がある



その平場から振り返って見たところ



さて、烽火台(鐘撞堂)があったところから東方向へ少し下って行く



左手に小さな池がある



説明板がある





宝ヶ池



いざ戦となって山城にたてこもっても、水がなくては戦いどころではありません。

宝ヶ池は、津久井城の水の手（溜井）のひとつです。江戸時代の地誌『新編相模風土記稿』は、「日照りや雨が続いた年でも、いつも安定して水をたえている」と記しています。水が白く濁っていることから城兵が刀を研いだとも伝えられます。また水が枯れないところから雨乞いの行事にも使われました。

津久井古城跡



山城と水

中世にまとめられた城作りの手引書『築城記』は、山城を築くときの心得として、まず「水があることが大切、また水の手（井戸など）は遠くにつくってはならない」と記しています。水は戦はもとより、日常の城中生活に欠くことのできないものだからです。また「水が枯れるので、やたらに尾根を掘ったり、大木を伐ってはいけない」ともあります。水の確保には常に気を配っていたことがわかります。

津久井城の水源

津久井城では宝ヶ池のほか、本城曲輪の北側と御屋敷跡で井戸跡が見つかっています。また山麓にはいたるところに水源があり、今でも豊かな水が湧き出しています。

津久井城は水で苦労することはなかったでしょう。

飯講神社の右下に宝ヶ池が描かれているのがわかります
【新編相模風土記稿】より

こんな感じ



脇にはこんな石碑が立っていた



さて、そこからもう少し東方向へ下って行く



すると、こんな感じの堀切がある



反対側から見たところ





堀

切

堀切は尾根法いに攻めてくる敵を防ぐため、尾根を逆台形に深く堀り込んだものです。

左手に堀切を見下ろしたところ



右手に堀切を見下ろしたところ



更に進んでいくと前方に平場がある



ここがその平場への虎口のような



この平場が<鷹射場>



標柱に「鷹射場」と記されている



さて、<宝ヶ池>まで戻り、西方向へ少し進むと<大杉>があった





津久井の名木
大スギ

科 目 すぎ科スギ属
樹 高 二五メートル
樹 齢 推定九〇〇年

特 徴 日本各地に広く自生し、
最も多く植林されている。
常緑針葉高木。葉は線香の
材料とし、樹は、庭木、建築材
などに用いられる。高さ
三〇〜四〇メートルになる。

所在地 津久井町 城山山頂
管理者

財かながわトラス「みどり財団」
津久井地区推進協議会
津久井町
平成十三年三月設置

大杉は落雷により焼失しました

平成 25 年 8 月 11 日午後落雷により焼失。詳しい内容はバーズセンターで展示中です。



平成 13 年 8 月撮影



平成 25 年 8 月 11 日撮影

さて、最初に車坂(男坂)を登り切ったところにあったベンチのところから、今度は<飯綱曲輪>と反対の西方向(正面)へ行こう



少し行くとここを左手に折れて進む



こんな感じを進むと平場がある



ここは家老屋敷跡のようだ



西方向を見上げたところ/この上に<太鼓曲輪>があるようだ



その上に登って行く



ここが<太鼓曲輪>



標柱に「太鼓曲輪」とある



さて、更に西方向に進むと説明板がある





ほり きり ひき はし 堀切と引橋

戦になると、ふだん使っていた橋をはずし、本城曲輪へ攻め入ることが困難になる仕組みになっていました。



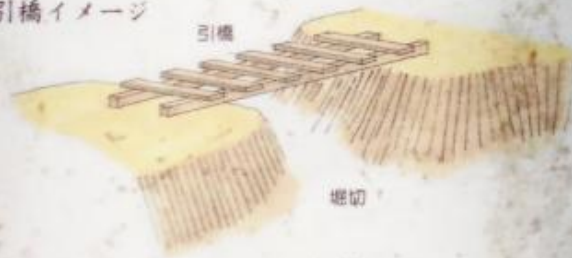
堀切は尾根伝いに攻めてくる敵を防ぐため、尾根を逆台形に大きく掘り込んだものです。平時は木橋がかけられていますが、いざ戦となると橋を引いたり落としたりして敵を防ぎました。津久井城では山頂の尾根に三箇所堀切があります。

山頂遺構見取図



復元された木橋（山頂遺構、静岡県三島市）

引橋イメージ



(堀切に架かるはしごを想定してみました。このような簡易なものだったかもしれません。)

引橋について

山城では木橋や土橋が使われます。この場所には引橋の地名が伝えられており、また古地図にも橋が描かれていることから、堀切を渡る木橋が架けられていたものと思われます。木橋の構造はよくわかりませんが、はしごを横にねかせたような簡易なもの、ゴクや車輪を使い移動することができる引橋、もちろん現在の橋のように固定されたものもあったようです。ただ、その多くは非常時には簡単に取壊したり、移動することができるものでした。

山頂遺構見取図



これが<堀切>



ひ

土橋から左手を見たところ



その先はこんな具合



土橋から右手を見たところ



その先はこんな具合/豎堀となって落ちている



土橋を渡って振り返って見たところ



さて、そこから西方向へ更に進むと、ここにも堀切とそこを渡る土橋があった



堀切の左手を見たところ



堀切の右手を見たところ



土橋を見たところ



更に少し西方向へ進むと切り通しのような道(虎口)がある/文化財として縄張で保護されており、「立ち入り禁止」/左手に迂回する



すると平場になっており、虎口から上がってくるここに土蔵などがあつたらしい/東側から西方向に見たところ



右手に標柱が立っている



「土蔵」とある



西側から東方向に見たところ



さて、その平場を越えて更に西方向に進むと説明板が立っている/説明板によるとこの平場は米曲輪で、右手が<本城曲輪>への虎口で門跡のようだ/正面の高まりは<本城曲輪>を囲む土塁



左手(南側)から右手(北方向)を見たところ



その左手を見たところ/米曲輪か延びている



この土塁の上が城山山頂



北側から南方向にその城山山頂を見たところ/山頂に石碑が立っている



津久井城の歴史

津久井城の位置

津久井城は地理的には、北方に武蔵国、西方に甲斐国に接する相模国の西北部に位置しています。そして、八王子から厚木・伊勢原、古代東海道を結び八王子道と、江戸方面から多摩丘陵を通り、津久井地域を東西に横断し甲州街道に達する津久井往還に近く、古来重要な水運のルートであった相模川が眼前を流れていることなどから、交通の要衝の地でもありました。また、津久井地域は、その豊かな山林資源から、経済的に重要な地域としても認識されていました。

このように、津久井地域は、中世の早い時期から政治・経済・軍事上の要衝であり、利害の対立する勢力のせめぎ合いの場でもありました。

いつごろ、誰がつくったのか？

津久井城の築城は、鎌倉時代三浦半島一帯に勢力を誇っていた三浦氏の一族、津久井氏によると伝えられています。戦国時代、小田原城を本城とした北条氏は16世紀中ごろまでには、相模・武蔵を領土とする戦国大名に発展しました。そしてこの広大な領土を運営し、専断力から守るため本城の下に支城を設け、支城領を単位とする支配体制を作りしました。当時の津久井地域は甲斐国境に近く、領土経営上重視されており、津久井城（城主内藤氏）は有力支城のひとつとして重要な役割を果たしていました。現在残っている遺構は16世紀に北条氏が整備したものです。

津久井城が滅びたのは？

天正18年(1590)、豊臣秀吉の小田原攻めの際、北条方の関東の諸城も前後して落城しました。津久井城は徳川勢の本多忠勝、平岩親吉ら12,000人の軍勢に攻められ、6月25日に開城しました。城の南に広がる金原地区には、前陣場、奥陣場、善どき堀、善導など、戦に関連すると考えられる地名が残されています。



歴史地図：柏江市 石井龍雄氏 所蔵



津久井城の遺構

根小屋式山城の遺構

城には置かれている地勢によって、山城、丘陵、平山、平城がありますが、独立した山に築かれたものが山城で通常、山城は平地の面積が狭いため城主の館や家臣の館などを山麓に置きました。これが根小屋であり、山麓に館を置いた山城のことを根小屋式山城といいます。

津久井城は、戦国時代の根小屋式山城の様子を伝えるような遺構がそのまま残っています。

山城部分の遺構

標高375mの山頂、西峰の本城曲輪、太鼓曲輪、南峰のある東峰の扇陣曲輪を中心に、各尾根に小曲輪が階段状に設置されています。これらの曲輪には土壁や、一部石壁の遺跡も残っています。

また、山頂尾根には敵の動きを防ぐため、3箇所に大が、山麓には沢部分を掘削・拡張した長大な塀が築かれています。

扇陣神社の東下にある宝ヶ池と呼ばれる溜井は今でも残っています。

根小屋部分の遺構

根小屋は、根本・城板、小堀、荒久、高込地区一帯に広がっていたと推定され、各地区で大小の曲輪が確認できます。特に城板地区にはお屋敷跡、高堀、左近馬屋などの地名が残されており、津久井城の根小屋の中心と考えられています。

また、お屋敷跡の発掘調査では、建物の礎石や礎石跡、深さ3mにも及ぶ空堀、土壁跡などが見つかり、城主館跡と考えられます。





これが城山山頂にある津久井古城碑



築井古城記碑

指定年月日 平成19年4月1日

築井古城記碑は城主内藤氏の家臣、島崎氏の末裔で、当時の根小屋村名主島崎律直により文化十三年(一八一六)頃に建立されたもので、津久井城の地形や沿革、内藤氏の系譜の一説、建碑の由来等が記されています。題額者は白川少将朝臣(松平定信)、撰者は大学頭林銜、書者が国学者屋代(源)弘賢、そして碑文を刻んだのが広瀬群鶴と、制作には当時の一流名士が関わっています。

築井古城記

大学頭林銜撰 白川少将朝臣題額 源弘賢書

築井古城、相の築井の隈安ヶ峰に在り。室ヶ峰介立すること百余後、相水の險に攀え、上城れて双立と爲る。東丘に飯糰河有り、其の西丘を古城と爲す。聖堂の址礎として存す。其の始めて築く者を築井太郎義房と曰う。県と城とは氏に因む。北条氏の時、左近将監内藤景定これに居す。大和守景重、六郎右衛門景友を生む。皆北条氏の良也。景友、角右衛門景次を生む。亦父祖の風有り。北条氏亡びて景重終わる所を知る莫し。

阿部俊正、景次の勇武を聞き、延きて幕中に置く。軍興る毎に賓客を以て従い、健闘して陣を隔れ、向う所皆奇捷有り。主人を佐佑して、能く大封を聞く。其の二子をして任へしむ。長は貞次家老に陞る。季は豊展。豊展、定次・重次・定高に歴事す。定高卒す。正盛幼なり。豊展に命じてこれに傳たらしむ。心を尽くして輔翼し、以て克く其の封を襲しめる。正盛既に立つ、太叔某平かなる能わず、豊展を誣るるに、欺罔を以てし、これを逐う。豊展の母は、植村侯家政の従母也。故に往きて焉に依る。遂に仕え、其の子豊弘も亦これが老と爲る。景次の後、是に於いて分かれて兩家と爲る。

初め景重の亡ぶるや、其の臣馬場佐渡・島崎掃部留まりて其の邑に居ること二百余年。世高家と臣主の礼を講じて衰えず、頃者掃部の裔律直、其の事を述述して、朝士源弘賢に因りて請いて曰く。直の父宗藏、常々故君の世已に遠く其の城日にやぶれ我が子孫の漸く其の由る所を遺れんことをおそるる也。石を故墟に樹てて、以て来世に告げんと欲す。未だ果たさずして死す。直實にこれを傷む。願わくば爲にこれを書せよと。嗚呼、北条氏閉左に盤据すること五世、八國を并吞し、百城を雄視す。当時此れと相較ぶれ者、甲越の鷲悍を以てすと雖も、猶加うること有る能わず。其の疆域の大なるに至りては、惟毛利氏と北条氏と有るのみ。故に其の猛將林立し、頭卒雨の如ければ、自ら以て、子孫千載不拔の業也と。其の君昏闇にして奸臣柄用せらるるに及びや、幾う自ら恣にし、一旦にして自ら覆滅を取る。是れ憫れむべき也。

余嘗て西上し、小田原を通ぎ、講う所の早雲寺なる者を觀、其の五世の丘壘を訪うに、さん削夷滅、殆ど的知すべからずして、名・官・諡号の記家々乎として尋丈の間に駢列するのみ。傷古の感、行道の人皆これ有り。当時國滅びるの後、其の將相大臣の故君に託し、以てぶ仕に登る者、邦國に駢列す。而して墳廟の依稀落莫、此に至るは何ぞや、其れ果たしてこれを忘れたる歟。

願に彼の佐渡、掃部なる者、固より皆陪台の撤にして子孫又降りて民伍と爲る。豈に其の故君に藉りて軒轅を爲す者ならん哉。乃ち独り臣僕の礼を二百余年の久しきに執る。而して律直父子又能く文を誦い、以て之を傳ふる。傷なる哉。忠孝世其の美を濟すなり。抑彼の内藤氏の其の臣僕を結ぶは、其れ亦非也。諸臣を持つに異なる也夫。是れ皆喜ぶ可き也。遂に書してこれを予う。阿部侯今は福山城主、植村侯今は高取城主、景次八世の孫景弘、豊展七世の孫景明、見に二侯に仕えて俱に頭要に居ると云う。

文化十三年冬十一月廿又八日

島崎律直建 広瀬群鶴刻

出典「津久井町史」資料編近世1

相模原市教育委員会

文化財保護課

〇四二七六九八三七一

津久井古城碑



これは城山山頂の北側の平場である<本城曲輪>を見下ろしたところ/そこにも説明板が立っている





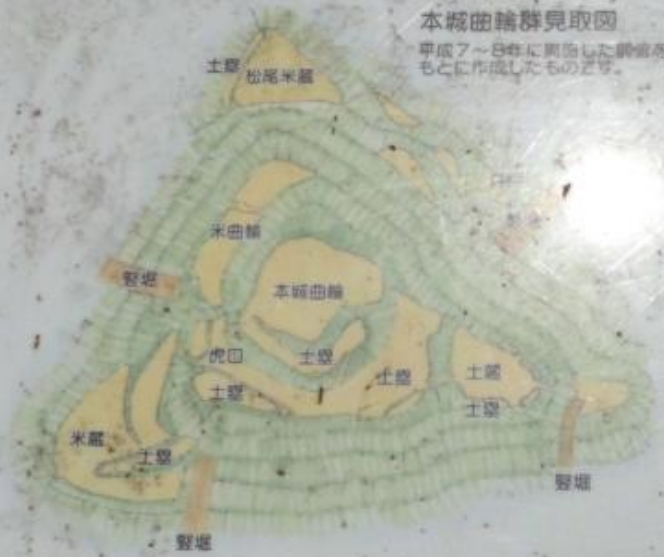
ほんじょうくるわど 本城曲輪と土塁

津久井城の中心です。戦時に城主がたてこもる最後のとりです。

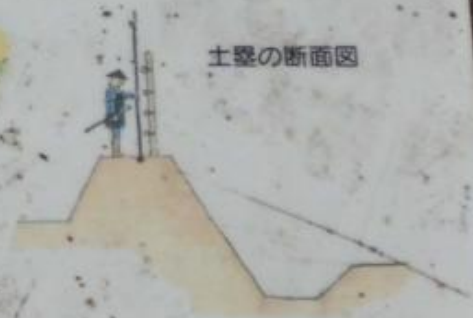
本城曲輪は津久井城の中心です。周囲の尾根には何段もの曲輪や長大な堅堀が掘られるなど、とても堅固な作りになっています。土手状に残った部分が土塁です。これは土を突き固め盛り上げた防壁で、敵を攻撃する台としても使われました。

本城曲輪群見取図

平成7～8年に調査した調査結果をもとに作成したものです。



土塁の断面図



- 虎口：こぐち
城の出入口。各曲輪にある出入口のことです。
- 曲輪：くるわ
「郭」とも書く。尾根や傾斜地を造成し平坦地をつくり、堀・土塁・橋などで囲み建物などを構えた区画
- 堅堀：たてぼり
尾根下を斜面伝いに横から侵入する敵の動きを防ぐため、山の斜面に直角に掘られた堀



諸国古城之図より津久井城
(広島市立中央図書館浅野文庫)

諸国古城之図によると、本城曲輪周辺には大小の曲輪がいくつも重なり、土塁(—)や堅堀(■)表示があることもわかります。

<本城曲輪>から土塁の上の城山山頂を見たところ/北側から南方向に見る



西側から東方向に土塁の上の城山山頂を見たところ



その左手を見たところ



これは城山山頂から東方向を見下ろしたところ



これは城山山頂から西方向を見下ろしたところ/前方は津久井湖/手前は<本城曲輪>西側の米曲輪



その左手を見たところ/左手に米蔵への虎口がある



これは<本城曲輪>西側の米曲輪を南側から北方向に見たところ



これが津久井湖



振り返って南方向を見たところ



この左手を下りて行くと米蔵に至るようだ



ここがその虎口(米蔵枡形虎口)



下に平場がある



こんな感じ



更に下に進む



そこはこんな平場/ここが米蔵



周囲は土塁状になっている/南側からここへ上ってくるルートが大手道だったという



石積みの名残りが見られる



アップで見たところ



さて、これは城山を下りてくる途中にあった石碑



「築井城趾」とある



だいが下りて来たところにある東屋から津久井湖が見える



これはパークセンター近くにある社





最後に駐車場から見た津久井城跡



参考ホームページ

<http://joe.ifdef.jp/03-001tsukui/tsukui.html>

<http://yogokun.my.coocan.jp/kanagawa/siroyamamati.htm>

<http://utsu02.fc2web.com/shiro77.html>

<http://senjp.com/post-2535/>

<http://www.geocities.jp/buntoyou/f11e/kn-f2049tsukui.html>

<http://umoretakajo.jp/Shiro/Kantou/Kanagawa/Tsukui/>

<http://www.uraken.net/museum/castle/shiro178.html>

<http://4travel.jp/travelogue/10800323>

<http://hina0011.blog.fc2.com/blog-entry-19.html>

<http://kahoo0516.blog.fc2.com/blog-entry-100.html>

